詩篇 86 篇

0 ダビデの祈り

Ａ．苦難の日の祈り

1 【主】よ。あなたの耳を傾けて、私に答えてください。私は悩み、そして貧しいのです。
2 私のたましいを守ってください。私は神を恐れる者です。わが神よ。どうかあなたに信頼するあなたのしもべを救ってください。
3 主よ。私をあわれんでください。私は一日中あなたに呼ばわっていますから。
4 あなたのしもべのたましいを喜ばせてください。主よ。私のたましいはあなたを仰いでいますから。
5 主よ。まことにあなたはいつくしみ深く、赦しに富み、あなたを呼び求めるすべての者に、恵み豊かであられます。
6 【主】よ。私の祈りを耳に入れ、私の願いの声を心に留めてください。
7 私は苦難の日にあなたを呼び求めます。あなたが答えてくださるからです。

Ｂ．唯一なる神への信頼

8 主よ。神々のうちで、あなたに並ぶ者はなく、あなたのみわざに比ぶべきものはありません。
9 主よ。あなたが造られたすべての国々はあなたの御前に来て、伏し拝み、あなたの御名をあがめましょう。
10 まことに、あなたは大いなる方、奇しいわざを行われる方です。あなただけが神です。
11 【主】よ。あなたの道を私に教えてください。私はあなたの真理のうちを歩みます。私の心を一つにしてください。御名を恐れるように。
12 わが神、主よ。私は心を尽くしてあなたに感謝し、とこしえまでも、あなたの御名をあがめましょう。
13 それは、あなたの恵みが私に対して大きく、あなたが私のたましいを、よみの深みから救い出してくださったからです。

A’．敵対者からの救いを求める祈り

14 神よ。高ぶる者どもは私に逆らって立ち、横暴な者の群れは私のいのちを求めます。彼らは、あなたを自分の前に置いていません。
15 しかし主よ。あなたは、あわれみ深く、情け深い神。怒るのにおそく、恵みとまことに富んでおられます。
16 私に御顔を向け、私をあわれんでください。あなたのしもべに御力を与え、あなたのはしための子をお救いください。
17 私に、いつくしみのしるしを行ってください。そうすれば、私を憎む者らは見て、恥を受けるでしょう。まことに【主】よ。あなたは私を助け、私を慰めてくださいます。

84～88 篇まで「コラの子たちの詩」が連続する中で、唯一「ダビデの祈り」が入ってきています。詩篇の第三巻（73～89 篇）の中でも、「ダビデの祈り」というのは唯一です。

「コラ」について少し説明を加えておきましょう。遡ると、コラという名前が早い段階で旧約聖書に登場するのは、出エジプト 6:21 以下です（創世記 36 章にも「首長コラ」という人物が登場しますが、より重要なのはレビ族に属するコラでしょう）。

> **イツハルの子はコラ、ネフェグ、ジクリである。**《中略》 **コラの子はアシル、エルカナ、アビアサフで、これらはコラ族である。**（出エジプト6:21-24）

コラはレビ族という祭司系の部族に属する栄誉ある立場に置かれていました。コラはモーセとアロンの従兄弟に当たりますが、250 人のイスラエル人を扇動してモーセに逆らった結果、神の怒りにふれ、住まいもろとも地に飲み込まれるという悲劇に見舞われました（民数 16～17 章）。それでもその子孫は残され、やがて神殿の門衛、供え物の調理などの任に当たる特権にあずかっていきます。詩篇 42～49 篇にも「コラの子の詩」が多く収録されています。

さて、再び出てきた「コラの子たちの詩」の中で、どうして本篇だけ「ダビデの祈り」なのかは気になるところです。ダビデはコラの子たちにとっても王であり、おそらく礼拝奉仕に彼らを任命したのはダビデ自身だったのでしょう。それゆえに、彼らはダビデの礼拝の姿勢、ダビデの祈りをよく知り、あるところで記録していたのではないかとも考えられています。

本篇を敢えて音楽的に構造分析すると、「Ａ＋Ｂ＋Ａ」の三部形式と言えるでしょう。尤も、ＡとＢには連続性があるため、単純に分離できるものでもありません。冒頭のＡでぼんやりと表されていた「敵対者」がＡ’でより具体的に浮かび上がります。その中間のＢで、神に対する詩人の深い信頼が歌われています。

本篇には少なくとも以下のような特徴があります。

①「主よ」（אֲדֹנָי／アドナイ）という呼びかけが多い
② 多くの願いが並べられている
③ 神の性質が豊かに表されている

①「主よ」（אֲדֹנָי／アドナイ）という呼びかけが多い

新改訳では「ヤハウェ」のときには「**【主よ】**」、「アドナイ」のときには「**主よ**」と記すことにより、原文のニュアンスが伝えられています。本篇全体では「**主よ**」（アドナイ）が７回使われていて（３節、４節、５節、８節、９節、12 節、15 節）、神と詩人の関係が特に「主人としもべ」の関係として強調されています。

【参照】

「奴隷が主人を呼ぶ際に用いられた一般的なことばで、人間同士でも神と人との関係でも用いられています。神に対して用いる場合、それは『<u>神の絶対主権に対する神のしもべとしての信頼</u>』（新聖書注解）を表します。」（ハイデルベルク信仰問答 問 34 からのショートメッセージより）

② 多くの願いが並べられている

祈りの詩らしく多くの願いが散りばめられていますが、その内容が単なる反復ではない点に注目です。

- **あなたの耳を傾けて、私に答えてください。**（１節）
- **私のたましいを守ってください。**（２節）
- **あなたのしもべを救ってください。**（２節）
- **私をあわれんでください。**（３節）
- **あなたのしもべのたましいを喜ばせてください。**（４節）
- **私の祈りを耳に入れ、私の願いの声を心に留めてください。**（６節）
- **あなたの道を私に教えてください。**（11 節）
- **私の心を一つにしてください。**（11 節）
- **私に御顔を向け、私をあわれんでください。**（16 節）
- **あなたのしもべに御力を与え、あなたのはしための子をお救いください。**（16 節）
- **私に、いつくしみのしるしを行ってください。**（17 節）

この中で特に心を惹かれる表現が 11 節に出てきました。「**あなたの道を私に教えてください**」「**私の心を一つにしてください**」とあります。何か詩人が道を見失っているかのような、御名を恐れることにおいて心が分裂しているような状態であることが窺われます。主イエスが山上の説教の中で語った「心のきよい者は幸いである」（マタイ 5:8）の「きよい」とは、「二心のないこと」と解釈することができるでしょう。心に分裂なくまっすぐ神を見据えて生きている人は「その人たちは神を見る」とまで言われています。詩人が見出そうとしている「**道**」というのも、罪によって曲がっていない、偽りなき澄んだ心の目で神を見つめることなのでしょう。

③ 神の性質が豊かに表されている

回数こそ多くはありませんが、本篇には神の恵み深い性質が豊かに表された節が存在します。

- **まことにあなたはいつくしみ深く、赦しに富み、あなたを呼び求めるすべての者に、恵み豊かであられます。**（５節）
- **あなたは、あわれみ深く、情け深い神。怒るのにおそく、恵みとまことに富んでおられます。**（15節）

これらの聖句は旧約聖書の他の箇所が反映されており、とりわけモーセが頑ななイスラエルの民を主にとりなすときに語った祈りのことばと多くの点で一致しています。

- **【主】、【主】は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者、罰すべき者は必ず罰して報いる者。**（出34:6-7）
- **【主】は怒るのにおそく、恵み豊かである。咎とそむきを赦すが、罰すべき者は必ず罰して、父の咎を子に報い、三代、四代に及ぼす。**（民数 14:18）

これらの聖句と照らし合わせてみると、本篇では神の「いつくしみ」「赦し」「恵み」「あわれみ」「情け」「忍耐」「恵みとまこと」という要素に力点が置かれていることが分かります。詩人は厄介な敵対者と対面している状況でありながら、その敵を見ること以上に、恵み深い神と自分との関係を見つめていたのです。

私たちも祈るとき、神の性質を一つひとつ聖書から拾い上げてみましょう。それにより、神と自分との正しい関係が取り戻されていくはずです。なぜなら、それは神の一方的な愛と恵みに浴するということだからです。自分の義を立てるのではなく、神の豊かな赦しと憐れみがこの関係に先立って行きます。この交わりが密接に持たれているところには、敵は入る隙間もありません。私たちが何を見て生きているかが再確認させられる詩篇でした。